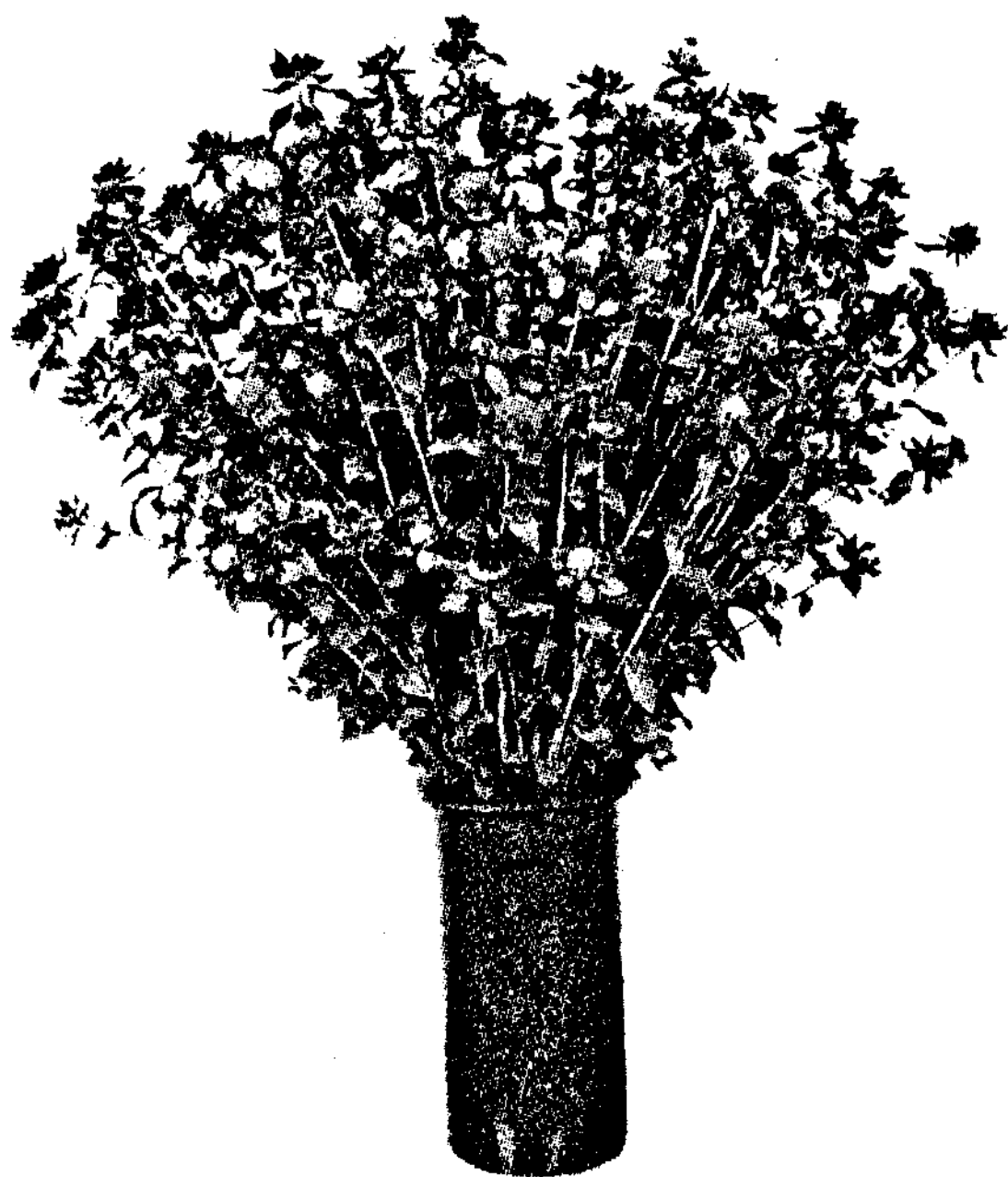


四、花 卉 編

工芸作物ベニバナの活路をひらく



人知れず思へば苦しけれないの
すえつむ花の色にいでなむ

(古今和歌集)

紅の初花染めの色深く
おもひし心われ忘れぬや

(古今集十四)

作型	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
電照加温栽培	電照												
	開花、収穫												
	直まき												
	加温												
加温ハウス栽培	定植加温												
	開花、収穫												
	鉢まき												
	ポット育苗												
無加温ハウス栽培	直まき												
	開花、収穫												
露地栽培	直まき												
	開花、収穫												
	直まき												

図21：ベニバナ（カルサムス）の作型

表14：ベニバナの主な特徴（大野）

品種	特徴	草丈 (注)	着花数	花の 大きさ	開花期	その他
もがみ ベニバナ		高	多	中	7/中～7/下	トゲあり 分枝数多い
とげなし ベニバナ		中	少	大	7/上～7/中	トゲなし 分枝数少ない
黄花 ベニバナ		高	多	中	7/中～7/下	花色黄
白花 ベニバナ		高	多	中	7/中～7/下	花色白 染料はとれない

注) 播種期が遅れると草丈が伸びない。

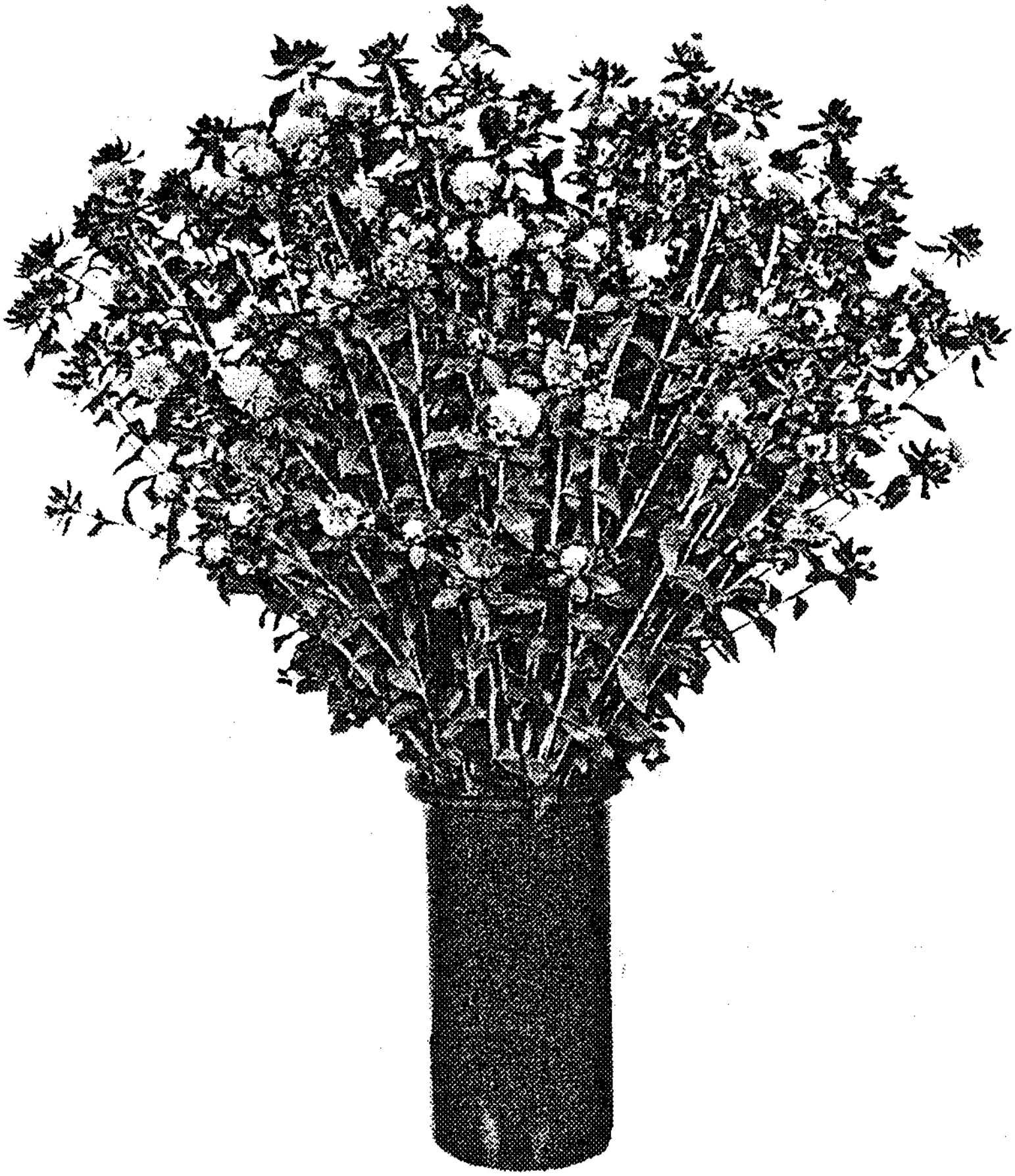


図22：ベニバナのドライフラワー（殖銀記念誌による）

ベニバナは生花に活けて良し、それが終わったら、そのまま下げてドライフラワーにしても楽しめる。また、蕾のものは顔を書き入れて人形仕立ても可能だという。

わが国におけるベニバナ栽培は、今から四〇〇年以上前にはじめられたとみなされているが、この間の栽培は、油料作物ではなく染料作物としての栽培が中心で、わずかに子実を搾油して灯油作りなどが行われていたものと考えられる。

しかし、明治政府の貿易振興政策により、中国から「唐紅」と称される紅の輸入が行われ（表20）、さらにドイツなどから合成染料（アニリン系の赤色染料）の輸入が行われるようになり、明治一〇年頃にはベニバナの商取り引きが衰退してしまった。

その後、ベニバナの絶滅を惜しむ有志によってほそぼそと栽培維持がはかられたものの、明治末期には、皇室御用のためのわずかな生産量がみられるだけとなり、それが大戦突入とともに、食糧増産の義務を負わされ、ベニバナ栽培はついに絶えてしまった。

戦後、山形のベニバナは微量ながら染料、化粧品用として栽培復興がはかられたが、国内の他県では「新油料作物」としての導入例もあり、各方面からの検討がなされ、花卉としての栽培もハウスの普及にともなって実施されはじめた。

最近では、わが国のベニバナは染料、化粧用、油料作物としてよりも、花卉（切花、ドライフラワー）としての需要の方が増え、往時とは比較にならない、新分野での活躍が期待されている。

1 切花

切花の利点 ベニバナは露地栽培のほかハウスの周年利用をはかる、いわゆる後作作物として、ユリやストックなどの収穫あと地に栽培できる利点がある。ベニバナは長日性植物なので、加温と電照を組み合わせることにより開花時期が促進され、三月中旬頃から切花生産が可能である。

ベニバナは省力、省エネタイプの花卉で、芽かき作業も不要、病害虫の発生も少なく、三・三㎡当たりの切花本数が多く、一八〇本くらい採花できる利点がある。

一般に夏の切花は水あげが悪いのが相場であるが、その点、ベニバナは水あげでは問題がなく、かえって茎の色が涼を呼ぶなど、夏の花としての評価が高く、工夫すれば南から北まで各地で栽培が可能である。

作型のいろいろ 花卉としてのベニバナ栽培には、露地栽培のほか、促成、抑制の両調節栽培が工夫されている。その主な作型は図21に示したが、例えば沖縄では亜熱帯的気候条件をいかして、超促成栽培（一〇、一一、一二月まき、三、四月出荷）が行われている。また、一方では高冷地を利用して抑制栽培が行われている。すなわち、七月下旬か八月上旬頃タネをまき、九月下旬から一〇月上旬にかけて切り花を生産する作型である。

栽培方法 前に述べた栽培技術と基本的には同じであるが、ハウス栽培の場合は前作の関係

で施肥量を加減すること、まき幅、通路などをきめ、株間は一二×一〇cmくらいにする。

2 ドライフラワー

ベニバナは生花として観賞したあと、ドライフラワーとして楽しめる利点を持っている(図22)。収穫期(採花期)は満開になってからであるが、他の切り花のように花房が展開しないので、花べんが黄橙色になった頃に収穫する。

六、七月の高温多湿期間の出荷は、輸送中のムレで葉や花が退色しやすいので注意が必要である。それでなくても、ドライフラワーは、しだいに退色するので、退色防止対策(急激乾燥法など)がこうぜられなければならない。

以上、ベニバナの花卉としての栽培法の概略を述べたが、切花用には、花色は白、黄、橙黄色のものがあり、葉や苞にトゲのない品種もあり人気を呼んでいる。市場ではわざわざカルサムスと学名で呼ぶ場合もあるが、今後は野生種などの導入をはかれば花色はさらに豊富なものになるであろう。山形県産のベニバナを加工し、クリスマス用品としてヨーロッパなどに輸出しようという話もあった(山形新聞)。